

多紀元堅「傷寒廣要」

傷寒廣要序 多紀元胤

舍弟亦柔夙承_二箕業_一、與_レ余同_二硯席_一、交_二師友_一、議論切劘、矻矻窮年、以研_二方術_一爲_レ念、頃著_二一書_一、謂_レ余曰、傷寒之爲_レ病也、自_レ古稱以_二大病_一謂爲_レ難_レ治、南陽張子所_レ以傷_二宗族之淪喪_一、慨_二時士之蒙昧_一、尋_レ訓以定_中經方_上也、苟志_二于醫_一者、固當_レ究之急務、孰不_二講_一明其理_一乎、然退而思_レ釋_二歷代諸家治_二傷寒_一之法_上、似_レ不_二甚通_一曉張子之意_一、先君子所_レ編輯義、芟_二除鞣轄_一、精義入_レ神、經旨於_レ是無_二復餘蘊_一焉、弟更憾_二古人之爲_二其說_一者、雜糅多岐、有_中使_レ後學猶不_レ得_レ闚_二張子之門牆_一者_上、蓋軒岐所_レ叙、祇し是熱病、表陽裏陰、以分_二六經_一、準_二日期_一擬_二汗下_一、言_レ常而不_レ及_レ變、舉_レ綱而不_レ及_レ目、張子觸_レ類長_レ之、以_二陰陽_一標_二寒熱_一、以_二六經_一配_二表裏虛實_一、常變兼該、細大不_レ遺、立_レ名約而析_レ事明、使_二人易_一辨識_一、但總_二外感_一、而名_二傷寒_一、先聖後聖、其揆一也、後人不_レ察_二張子內經兩途分鑣之故_一、彼此傳會、強配_二其目_一、或不_レ知_二傷寒爲_二外感總謂_一、實_二求邪氣_一、以立_二名類_一、若夫據_二當時流傳之證_一、與_二自己試驗之方_一、以爲_二一家言_一、有_中強辨奪_レ理、眩_二人心目_一、欲_レ高_二駕于張子之上_一、以律_中千百世_上者_甲、於_レ是爾來醫流、或尊_二一繼禰之小宗_一、而置_二大宗乎不_レ問、或自命太高、徒懸_二揣し經文_一、不_レ欲_レ旁_二涉群典_一、以爲_中會通_上、張子之微言奧義幾熄矣、要_レ之宋以上、則因_二循套習_一、金源以下、則務標_二新異_一、然至_二其深造自得之妙_一、則所_レ謂治_レ彼雖_レ偏、治_レ此則是者、未_レ始不_中補_二張子萬分之一_一、而有_上功_二于救_レ生也、弟不_レ顧_二謏劣_一、竊窃哀_二ほう_一諸家之要_一、而成_二此編_一、以_二其廣_一經旨_一、題曰_二廣要_一、然豈敢謂_レ列_二于作者之林_一、不_レ過_二爲_二自驗_一學術_一之地_上、與_中備_レ及門之尋檢_一而已、余執而閱_レ之、書凡十二卷、爲_レ篇凡十有四、其所_二採録_一、凡一百五十餘家、詮次排類、原_二之經旨_一、自_二診候平證_一、以至_二飲食將養之法_一、莫_レ不_レ眩載_一、其醇駁異同之際、精汰嚴收、去取有_レ法、而不_二敢贊_一一辭于其間_一、意在_二于尊_レ古也、亦柔爲_レ人、清修謹飭、不_レ類_二余落落然_一、宜乎、擇_レ言之精、援證之確、至_二于斯_一矣、夫傷寒證有_二真假_一、而表裏虛實、固無_二定局_一、治有_二權宜_一、而補瀉溫涼、又無_二常套_一、自_レ非_二平素講求_一、探_二其理致_一、則於_二見_レ病知_レ源之理_一、未_二必能有_レ所_二領會_一焉、亦柔克踵_二先君輯義之著_一、而爲_二此舉_一、其意微矣、余今更記_二亦柔之言_一、以爲_二之序_一、論_二後之讀_一是書_一者_上云、

文政丁亥仲夏胞兄元胤紹翁于蒼雪山房之南軒

舍弟_{元堅}亦柔_{エキジュウ・字(あざな)・男子は元服のとき実名のほかにつける・実名は両親、師など特別な目上の人が呼び一般の人はあざなで呼ぶのが礼儀だった}夙_{つと}に箕業_{キギョウ・箕裘之業・父の業(多紀元節)}を承_うける、余と硯席_{同じ師に就いて学んだ者}を同じくす、師友_{師と仰ぐべき友}に交わり、議論_{意見を論じ合う}切劘_{セツビ・学徳を立派にみがき修める}、矻矻_{コツコツ・よく勉強するさま}窮年_{一生涯}、以て方術を研_みがき念_{おもいをめぐらす}を爲す、頃_{このごろ}一書を著_かきあらわす、余に謂いて曰く、傷寒の病爲る也_や、古_{いにしえ}自_{より}稱_{のべる}に大病_{重症}を以てし謂_おもうに難治と爲す、南陽の張子_{張仲景}以て_{傷寒論卒病論集に}宗族の淪喪_{リンソウ・滅びる}を傷み、時士_{趨世之士・世渡りをする人の}蒙昧_{モウマイ・おろかで道理にくらい}を憤慨_{なげき}、訓を尋ね以て經方を定める所也と、苟_{いやしく}も醫を志す者、固く當に究めるべき急務、孰_{たれ}か其理を講_{とき}あかし明_らかにせざる乎

や、然して退しりぞいて歴代諸家の傷寒を治する法を思繹シエキ・考えたずねるするに、甚だ張子の意を通曉ツウギョウ・よくさとるせざるに似る、先君子亡父の尊称・多紀元簡編する所の輯義「傷寒論輯義」、鞅轆コウカツ・まじりみだれるを芟除サンジョ・かりのぞく、精義道理を充分にきわめる入神神・巧妙の域にはいる、經旨是に於いて復餘蘊ヨウン・残余無し焉、弟更あらためて古人の其説説を爲すは、雜糅ザツジュウ・みだれまじり多岐、後學をして猶張子の門牆モンショウ・師の門を闕うかがうを得ざらしめる者有るを憾遺憾とす、蓋し軒軒輅・黄帝岐岐伯叙のべる所内經、祇ただ是熱病、表陽裏陰、以て六經に分ける、日期期日に準じ汗下を擬はかる、常つねを言つて變ふつうでないできごととに及ばず、綱おおずなを擧げて目細目に及ばず、張子は觸類長レ之類に従つておし及ぼす、陰陽を以て寒熱を標あらわし、六經を以て表裏虚實に配す、常變を兼該ケンガイ・かねそなえる、細大細かいことと大きいこと遺のこさず、名を立て約縮・つづめて事を析わかち明あきらかにする、人をして辨識見分けるし易くせしむ、但凡・およそ外感外邪に感受することを總あわせて、傷寒と名づく、先聖古の聖人後聖後生の聖人、其の揆やりかた一同也、後人後生の人張子内經兩ふたつの途みち分鑣ブンヒョウ・道を異にするの故を察せず、彼此を傳會フカイ・くつつける、強しいて其目細目に配わりあてする、或いは傷寒は外感總謂意味を爲すを知らず、邪氣を實實在として求め、以て名づけ類似たものを分けるを立てる、若し夫當時流傳の證と、自己試験試み験することの方わざとに據拠り、以て一家言一派の言論を爲せば、強辨よくわきまえる理を奪い、人心の目を眩くらまし、張子の上を高く駕しのぎ、以て千百多くの世世間の人を律規制せんと欲す者有り、是に於いて爾來それ以来醫流、或いは一繼繼禰禰・デイ・ネ・みたまの小宗宗・世繼を尊べども、大宗父を継いで宗となる嫡子乎を不問すておくに置く、或いは自命自ら自分を立派であると認める・自認太高先祖、徒に經文を懸かけはなれる揣シ・おしはかる、群典多くの書物を芻旁・あまねく涉書物をたくさん読み、以て會通よく理會して凝滯しないを爲さんとは欲せず、張子の微言奥深い言葉・微妙な言葉奥義幾ほとんど熄きえる矣、之を要するに宋以上、則ち套古くからの習を因循古い習慣に従う、金源元以下、則ち務めて新異めずらしいを標たてる、然して其深造奥深く至る自得自ら心にさとの妙に至り、則ち所謂彼を治し偏半分と雖も、此を治せば則ち是とする者、未だ張子の萬分の一を補いて、生を救うに功有らざるなき也、弟譎劣センレツ・浅くして劣るを顧みず、竊窃・ひそかに諸家の要点を哀聚・あつめて、此編を成完成し、其の經旨を廣擴充げるを以て、題するに傷寒廣要と曰う、然れども豈敢えて作者著作する人の林同仲間列せんと謂うや反語、自ら學術を験ためすの地立場と爲し、及ならびに門門下生の尋檢ジンケン・たずねしらべるに備備える與ために爲すに過ぎざる而已のみ、余執とりて閱けみするに、書凡すべて十二卷、篇を爲す凡て十有四、其採録する所、凡て一百五十餘家、詮次センジ・えらび定めた順序排つらねる類法、之を經旨を原とし、診候平さだめた證自より、以て飲食將養の法に至る、賅そなわり載せざる莫なし、其醇純一である駁混じる異同不一致・まじるの際、精汰くわしくえらびわかる嚴收収、去取取捨に法有りて、敢えて一辭ひとことばをも其間に贊贊・いれず、意は古きを尊ぶに在る也、亦柔エキジュウの人と爲りや、清修手落ちなくおさめる謹飭キンチョク・つつしみぶかい、余われの落落然志を得ないさまに類たぐいせず、宜宜・よろしき乎、言を擇えらぶの精精緻、援引用する證の確的確、斯ここに至る矣、夫傷寒證に眞真假有りて、表裏虚實、固もとより定局無し、治に權宜宜・ケンギ・時と場合に応じて適宜に処置する有りて、補瀉温涼、又常套決まったやり方無し、平素講求しらべもとめる、其理致リチ・わけを探すに非ざる自よりはでない限りは、則ち病を見て源を知るの理に於いて、未だ必ず能く領會會得する所有らず焉、亦柔エキジュウ克よく先君輯義の著を踵ショウ・踏襲して、此の舉記

を爲す、其意微^{微・かくれる}矣、余今更^{あらため}て亦柔^{エキジュウ}の言^{ことば}を記^しるし、以て之れの序と爲し、後の是の書を読む者に諭^{あきらかにして}云う、

文政丁亥^{ひのとい（1827年）}仲夏^{陰曆五月}胞兄元胤^{字紹翁識^{しるす}}于蒼雪山房之南軒

元堅（1795--1857）

多紀元胤（1789--1827） 多紀元簡の三男で嫡子。父元簡に医学を学び、17歳で医学館督事になり39歳で法眼となるが同年死去。著作は医籍考 難經疏証 藥雅 他に父元簡の原著を元堅と共同で校訂出版